UNISYS

中部電力株式会社　様

導入ソリューション　Citrix XenApp（シンクライアント・ソリューション）

導入システム概要　基幹系業務端末約3000台をシトリックス社の
アプリケーション仮想化ソリューション
「Citrix XenApp」を用いてシンクライアント化

24時間365日止められないミッションクリティカルな基幹システムで利用する約3,000台の端末をアプリケーション仮想化ソリューション「Citrix® XenApp®」でシンクライアント化

導入の背景

端末に依存したアプリケーション環境からの脱却が急務に

「くらしに欠かせないエネルギーをお届けし、社会の発展に貢献する」を企業理念に掲げる中部電力様。お客さまに安定した電力サービスを提供していくうえで欠かせないのが基幹業務を支える販売系システムだ。同社で管理する販売系システムの業務端末の台数は約3,000台にも達する。しかも、販売系システムは、長年にわたって構築・改修を進めてきた結果、アプリケーションを操作する端末は固定されていた。そのため、端末にインストールされているアプリケーションの管理には多大な負荷がかかっていたという。「OSのサポート切れなどでバージョンアップを迫られるたびにアプリケーションの改修が発生し、相当のコスト負担と改修の手間を覚悟しなければなりませんでした」と、山田健史氏は振り返る。

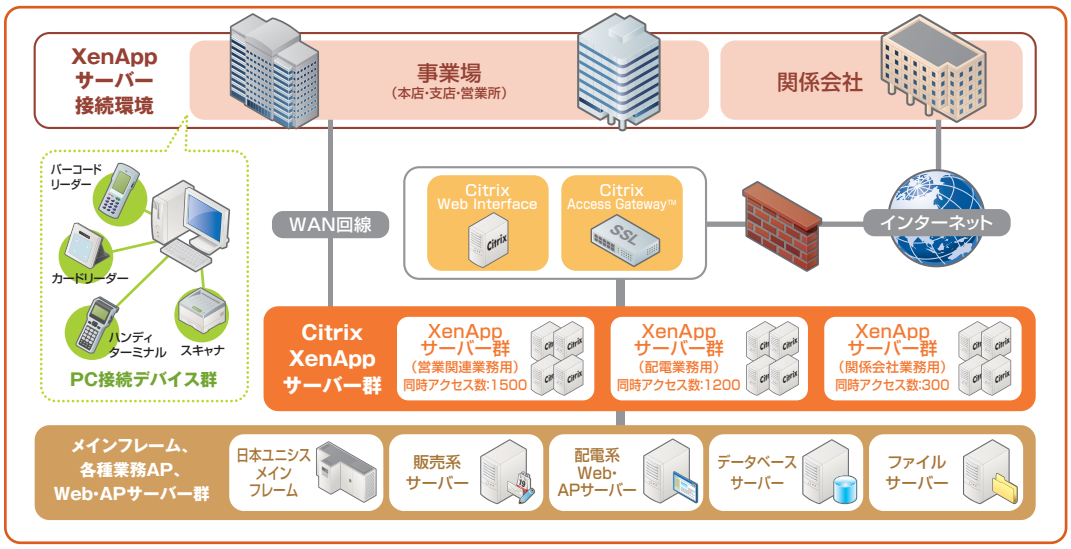
また、端末はハンディターミナルなど、さまざまな周辺機器と連携する環境にあり、端末調達時は競争原理が働かず、特定ベンダーに依存しがちとなっていた。栗林修氏は「情報システム部門としてコスト削減が命題となっている中で、販売系システムの業務端末に関しては、OSなど外部環境に依存しない運用管理体制を確立する必要がありました」と語る。

選定理由と導入の経緯

周辺機器との接続性と、狭帯域への対応を評価してCitrix XenAppを採用

中部電力様は、課題を解決するために端末本体にアプリケーションを置かないシンクライアント・ソリューションの導入を検討。日本ユニシスをパートナーに指名し、アプリケーションを仮想化するシトリックス社のXenAppを採用した。日本ユニシスの選定について栗林氏は「長年にわたり日本ユニシスのメインフレームを利用して販売系システムを構築してきた実績を評価しました」と振り返る。シンクライアント・システムについては、周辺機器とのインターフェース、狭帯域でも利用可能な「ICAプロトコル」に対応していることの2点を評価した。

しかし、開発段階で磁気カードリーダーなど一部の機器がCitrix XenAppと連携できなかったことから、日本ユニシスから提供されたUSBデバイス連携ソリューション「Virtual Channel Suite」を活用し、短期間・低コストで問題解決を実現している。シンクライアント化に際しては、サイロ化された既存アプリケーションなどをすべて稼働させるためにCitrix XenAppの「アプリケーション分離機能」を活用。その結果、個々のアプリケーション改修の必要がなくなり、開発工数の大幅な削減につながったという。



●導入企業の紹介●

時代の先へ。ひとりのそばへ。

中部電力

中部電力株式会社

設立
1951年（昭和26年）5月1日

本社所在地
愛知県名古屋市東区
東新町1番地

事業内容
電気事業およびその附帯事業、ガス供給事業、蓄熱受託事業、分散型エネルギー事業、海外コンサルティング・投資事業、不動産管理事業、IT事業ほか

ホームページ
http://www.chuden.co.jp/

●システムの概要

システム名称
Citrix XenApp
（シンクライアント・ソリューション）

システム概要
基幹業務系端末約3,000台をCitrix社のアプリケーション仮想化ソリューション「Citrix XenApp」を用いてシンクライアント化

導入の効果

端末1台あたり約40%の運用コストを削減

中部電力株式会社
情報システム部
共通基盤グループ
グループ長　部長
山田 健史 様

2008年から始まったプロジェクトは、検証、システム構築を経て、順次シンクライアントに移行。2012年末で約3,000台分のシンクライアント化が終了している。Citrix XenAppの導入によって中部電力様は、端末やOS環境に依存しない業務系システムへのアクセス環境を実現した。業務アプリケーションは、既存の端末上で稼働していたものをそのままCitrix XenAppサーバー上に移行しており、操作性や表示画面、デバイス利用などもすべて従来と同様だ。中條宏昭氏は「シンクライアントへの切り替え時もスムーズに業務を移行できました。ユーザーからは、操作性、性能、レスポンスなどについて、大きな不満の声は聞こえていません」と述べる。

Citrix XenAppの導入は、システムおよび端末の管理運用面についても効果をもたらした。業務系アプリケーションはすべてCitrix XenAppサーバー側で動作するため、管理者は端末単位の管理や開発から開放された。端末取替に伴うOS更新もアプリケーションへの影響を意識することなく実行できる。また、アプリケーションをサーバー側で一括管理するようになった結果、ライセンスコストの削減が実現。さらに端末の交換サイクルも、長期化が可能となった。交換サイクルの延長効果は非常に大きく、運用計画を司る情報システム部の工数削減に結びつくなど、管理コストの低減効果は確実に現れている。

「サーバーライセンス、アプリケーションの改修コスト、ライフサイクルの延長など、あらゆることを考慮すると、端末1台あたりのランニングコストは約40%ダウンしています。端末入札にも競争原理が働き、調達コストも低減できました」（栗林氏）

中部電力株式会社
情報システム部
共通基盤グループ
課長
栗林 修 様

今後の展望

端末の台数増とサーバーの仮想化を検討

約3,000台の業務系端末をシンクライアント化した中部電力様では今後、対応端末の台数を拡大していく考えだ。中條氏は「専用端末として利用している配電系端末を汎用端末と統合していく予定です。また、サーバーの仮想化による集約なども含めてサーバー台数の削減を検討していきます」と説明。さらに将来的には、デスクトップPCが主流を占める現在の端末をモバイルPCに置き換えるなどして、業務スタイルの変革を図ることも構想している。

経営面における貢献も長期的な課題で、プライベートクラウド環境の構築やオープンソースの利用によるさらなる生産性の向上に向けて正面から取り組んでいく予定だ。山田氏は「聖域なきコストダウンが求められている電力業界において、業務の効率化、可視化への取り組みがシビアに求められています。強力なパートナーシップを構築してきた日本ユニシスには、経営資源の最適化や新しいIT技術の適用などの側面から、幅広い支援を期待しています」と語った。

中部電力株式会社
情報システム部
共通基盤グループ
中條 宏昭 様

導入のポイント

- ホスト系、クライアントサーバー系、Web系と多岐にわたるアプリケーションの実行環境をCitrix XenAppに統合し、端末単位で発生するアプリケーション管理を廃止した。
- アプリケーションやミドルウェアを仮想化して端末に画面配信することで、端末のOS依存から脱却を図った。
- 旧端末は、業務に必須のバーコードリーダーや、ハンディターミナルなどの周辺機器に縛られていた。日本ユニシスの提供するソリューションで、周辺機器とシンクライアントとの連携を実現した結果、特定ベンダーの端末に拠らなくなり、競争原理による調達コストの削減につながっている。端末のライフサイクルの長期化も可能となり、運用管理コストが削減できた。
- システムの選定に際しては、日本ユニシスのホスト系システムの構築実績と、システム面での性能と信頼性の高さを評価。シンクライアント・ソリューションについては、複数のベンダー製品の中から、周辺機器との連携と狭帯域でも利用可能な「ICAプロトコル」を評価してCitrix XenAppを採用した。

※Citrix、XenApp、ICAおよびAccess Gatewayは、Citrix Systems,Inc. の米国あるいはその他の国における登録商標または商標です。
※その他記載の会社名および商品名は、各社の商標または登録商標です。

UNISYS

日本ユニシス株式会社
〒135-8560　東京都江東区豊洲1-1-1　TEL：03-5546-4111（大代表）
http://www.unisys.co.jp/solution/thinclient/